

山内の様相と人の動き

―八重滝鉦を中心として―

鳥谷 智文

はじめに

八重滝鉦については、『掛合町誌』(1)、『日本歴史地名大系33 島根県の地名』(2)の項目「八重滝鑪跡」に記載があるが、いずれも基本的事項の概説に留まっているように思える。よって本稿では、八重滝鉦の経営規模や山内について関係史料を分析し、その特徴を抽出することを目的とする。

八重滝鉦の操業については、次の史料にみられる。

文政八酉十月 入間村宮ノ前鑪場所替

一飯石郡竹尾村八重滝鑪一ヶ所

(「鉄山鑪鍛冶屋銅山書出(明治五年)」(明治六年国費部旧松江藩引継雑款」(島根県立図書館所蔵))

この史料によると、八重滝鉦は広瀬藩領飯石郡竹尾村に立地し、文政八年(一八二五)十月、広瀬藩領入間村宮ノ前鉦より移動し、操業した(3)。

前述の明治五年(一八七二)の「鉄山鑪鍛冶屋銅山書出」によると、八重滝鉦は田部家の経営である。ちなみに田部家では、明治五年段階で、八重滝鉦の他に菅谷鉦(飯石郡吉田村)、杉戸鉦(同郡同村)、中谷鉦(同郡松笠村)、弓谷鉦(同郡志津見村)、八代谷鉦(仁多郡上阿井村、櫻井家と共同経営、明治五年当時休業)を経営している。大鍛

冶場では、町鍛冶屋(飯石郡吉田町)、芦谷鍛冶屋(同郡吉田村)、杉谷鍛冶屋(同郡曾木村)、郷城鍛冶屋(同郡朝原村)、滝谷鍛冶屋(同郡松笠村)、奥畑鍛冶屋(同郡頓原村)、恩谷鍛冶屋(同郡刀根村)、獅子谷鍛冶屋(同郡角井村)を経営していた(4)。

このような田部家経営の八重滝鉦において、同鉦の操業規模などを示しつつ、鉦に従事する労働者を含めた家族、すなわち山内の状況を、「入間田部家文書」所収の「雲州飯石郡八重滝鑪午宗門改増減帳」や「宗門放状」、「宗門返証文」などで検討していく。以下、引用した史料は、特に断らない限り「入間田部家文書」である。

一 竹尾村及び近隣諸村の特徴

八重滝鉦の立地する竹尾村は、どのような特徴をもっているのか、まず本章で示しておく。表1によると、文化八年(一八一二)、竹尾村は、村の長さ東西一四丁、南北三四丁で、世帯数は一九軒であった。隣村の入間村で五一軒、穴見村で三四軒であり、竹尾村の世帯数は格段に少ないといえる。また、有高は竹尾村で三一石八斗一升二合ほどであった。入間村では一四〇石四斗四升二合、穴見村で一〇四石一斗三升七合とあり、世帯数と同様、竹尾村の有高が最も少ない。

時代を下って天保期における竹尾村の人口に焦点をあててみると、表2のように、天保七年(一八三六)では人口八〇人ほどであった。ちなみに入間村では二八五人、穴見村で一六六人であり、天保期においても竹尾村の人口は少なかった。また、嘉永三年(一八五〇)の松江藩領飯石郡内の村々の人口と比較してみると、表3より八〇人ほどの村はなく、竹尾村の人口は格段に少ないといえる。

天保期における米などの出来高は、表4より、天保七年、竹尾村で七六俵一升五合であった。入間村では三一俵一斗六合五勺、穴見村では一三八俵二斗一升五合であり、三村の中で出来高は最も少なかった。

竹尾村については、「一竹尾村之儀ハ入間村之分郷ニ而則万治年中御検知帳茂一帳ニ而石高三拾石余之小村諸事入間之四歩壺ニ相当申候」(5)とあるように、大変小規模な村であることがわかる。

よって、竹尾村の人々の生活は、入間村の人々もあわせて、「近來打続時節柄不宜一統困窮仕候所、村内ニ鑪御座候ニ付、是迄ハ鉄山・腰林等売払少々宛も御未進且者作喰等之助ニ仕、其上炭・灰木・小鉄・竈土をせおひ漸渡世仕居候処、入間鉄山論所之外者不殘伐尽し立木無御座、鑪吹統茂難相成ニ付、近來者都加賀鉄山買受、炭木等取寄、假成ニ吹方出来仕候得共、村方百姓・小作等者農業之余力ニ鑪稼仕候儀、他村越ニ而炭竈等難仕場所ニ寄、二里余も相隔居候得者足弱之者荷を掛往返仕候儀も難相成必至及飢命候程之難渋仕候、依而者右論山御裁判被仰付被下置候ハ、売払当分之凌方仕度奉存候」(6)とあり、鉄山・腰林を売り払うことにより、未進・作喰等の助けとした生活を送ってきた。具体的には、寛文十一年(一六七二)には、八重山鉄山を掛合村小林又右衛門に二十五年季で売り渡した際、その代銀は入間村・竹尾村両村へ入ったという事例がある(7)。また、炭・灰木・小鉄・竈土の輸送も生活の糧となっていた。前掲史料によると、近年(文化九年頃)は立木を伐り尽くし、遠方の都加賀鉄山から運搬し、足弱き者は運搬できず、生活苦に喘いでいる。このように、村にとって輸送業は、生活に欠かせない仕事となっていたのである。

すなわち、竹尾村に八重滝鉦が立地していることは、竹尾村及び近隣諸村にとって「鉦稼」をおこない生活を潤わせることができる重要

な稼ぎ場であったと考えられる。

村人にとって稼ぎ場であった八重滝鉦はどのような規模であったのか、次章では、同鉦の経営規模について検討する。

二 八重滝鉦の生産高及び販売額の特徴

相良英輔氏は、明治六年(一八七三)における八重滝鉦について、田部家経営鉦の中では、製品売上代、収益について菅谷鉦について大きいことを示された(8)。

本章では、相良氏の検討をふまえ、明治初年における八重滝鉦の生産高や販売量、販売額などについて、「出鉦表」(9)をもとに検討する。

表5によると、たたら製鉄の原材料である砂鉄は、田部家経営鉦全体の中で八重滝鉦は全体の二三・五%を占め、菅谷鑪についている。生産高も田部家全体の二四・七%で、菅谷鑪についていることがわかる。特に銑・鋤は田部家経営の鉦では最も大量であった。八重滝鉦で生産された銑・鋤の大半は大鍛冶場へ搬送され、割鉄に加工された。八重滝鉦生産銑・鋤を加工した割鉄も含め、生産物の販売高は、田部家経営全体の一九・二%であり、菅谷鉦、中谷鉦について三番目であった。販売額は、全体の一九・八%で、これも菅谷鉦、中谷鉦について三番目であった。入費(諸経費)は、全体の二三・八%で、菅谷鉦について二番目であった。収支損益は、入費が高額であったことが影響してか、全体の一一・七%に留まっており、それほどの利益はあがっていないように考えられる。

次に八重滝鉦の生産内訳及び販売内訳はどのような特徴があるのであろうか。表6によると、生産高は、鋼三・〇%、銑六八・六%、鋤

二八・四％の割合であり、鋼の生産がほとんどなく、銑の生産が約七割を占めていた。八重滝鈦生産銑・鋤を原材料にした割鉄も含めて販売高の割合をみると、鋼六・二％、銑七・一％、鋤〇・一％、割鉄八六・六％となり、販売額の割合は、鋼三・五二％、銑三・五〇％、鋤〇・〇四％、割鉄九二・九四％であった。

以上の分析から、八重滝鈦は、生産規模は田部家の中でも大きな規模であったことがいえる。生産内訳は銑の生産が多く、大量に生産した銑・鋤は割鉄加工のため、大鍛冶場へ送られ、加工された割鉄は、大量に販売された。また、八重滝鈦では必要経費が他の鈦よりも高額だったため、利益はそれほどあがっていない。

このような操業規模の八重滝鈦の山内はどのようであったのか、次章でその一端を示してみたい。

三 八重滝鈦山内の特徴

本章では、八重滝鈦の山内について、安政五年（一八五八）八月の「雲州飯石郡八重瀧鑪午宗門改増減帳」を検討していく。

表7によると、八重滝鈦の山内では、安政五年で一六人が居住していたと考えられる。その内訳は男性六二人、女性五四人であり、男性が若干多かった。翌年には、一二五人となっており、九人の増加となっている。その内訳は男性が八人増の七〇人、女性は一人増の五五人であった。男性の増加が目立っている。表8によると、安政五年段階で禅宗が六七人、一向宗が五八人であった。

参考までに嘉永三年（一八五〇）「飯石郡中宗門改村別人高書出帳面」（原家文書、島根県立図書館所蔵）によると、田部家基幹鍛冶屋である町鍛冶屋の山内では、表3より、男性二〇一人、女性一六三人、

合計三六四人であった。町鍛冶屋と比較すると八重滝鈦はその三分の一度程度であるが、竹尾村、入間村にとつては、大きな雇用となったであろう。

安政五年から同六年にかけての増減状況の内訳は表9のようである。表9によると、増人は、七世帯一人であり。その内訳は、戸主・女房・子四人の世帯が一世帯、戸主・子二人の世帯が一世帯、独身男性が一世帯、山内に養子に入った男性が一世帯、男性赤子の誕生による増加が二世帯であった。減人は戸主と姉二人の一世帯があった。

八重滝鈦山内へ移動した彼らは、どこから移動したのか。表9によると、松江藩領では、仁多郡竹崎村・大谷村、大原郡阿用村から移動したことがわかる。いずれもたたら製鉄の盛業地域である。また、石見地域では、邑智郡井原村、奴可郡久佐村からの移動があった。井原村もたたら製鉄の盛業地域である。

四 「宗門放状」、「宗門返証文」よりみえる

山内労働者の移動状況

本章では、入間田部家文書から八重滝鈦山内に関わる「宗門放状」、「宗門返証文」を取り上げ、八重滝鈦山内における人々の移動状況の一端を紹介する。

史料①

宗門放状之事

表御領飯石郡吉田村源兵衛女子すき歳貳拾三宗旨代々真宗同郡同村西福寺旦那二而年々吉田村宗門御改帳付紛無御座候、然ル處此度廣瀬御領飯石郡竹尾村八重瀧鑪福次郎妻二罷成引越参申候、其御地江参候而者宗旨禅宗同郡入間村長栄寺旦那二契約仕筈二御座候、依之右西福寺

より長栄寺宛宗門放状相添送進申候、於其元無別条者来未宗門御改より其鑪増人ニ御書載可被成候、此元減人ニ書出し可申候、自今以後此方何之構無御座候、為後日宗門放状仍而如件

表御領飯石郡吉田村

弘化三年

年寄佐平（印）

午

年寄喜作（印）

年寄善次（印）

庄屋莊一郎（印）

下郡清一郎（印）

廣瀬御領飯石郡

竹尾村八重瀧鑪鉄師

田部新四郎殿

史料①は、松江藩領飯石郡吉田村の成人女性「すき」が八重瀧鉦山内の一員となった。その理由は当鉦山内労働者「福次郎」の妻となるためであった。この事例は、松江藩領の農村から廣瀬藩領の鉦山内への移動である（10）。

次に史料②をみてみよう。

史料②

宗門放状之事

一向宗明眼寺旦那

一林蔵 歳四拾貳

女房

一きま 歳三十九

女子

一ゑし 歳十五

男子

一惣次郎 歳拾四

女子

一すめ 歳拾壹

べ五人 男貳人

女三人

右之者弓谷鑪鉄山帳附ニ紛無御座候處、同所鑪稼方中絶ニ相成、依之八重瀧鑪江引越参り度旨願出申候ニ付寺証状相添送り申候間、御受込可被成候、然ル上者当戌宗門御改より御互ニ増減書出可申候、為後日放状仍而如件

天保九

弓谷鑪支配人

田部長右衛門

（後欠）

史料②では、広瀬藩領飯石郡志津見村に立地していた田部家経営の弓谷鉦の鉄山帳に記載されていた林蔵とその家族五人（男性二人、女性三人）が、八重瀧鉦へ引越してきたことを示している。その理由は、弓谷鉦が操業を中止したためであった。弓谷鉦は、天保八年（一八三七）には、「弓谷鉦付鉄山残無ク伐尽シ、最早吹方相続相成り難ク、抛無ク中絶仕り度キ旨、御願申上度ク存ジ候」とあり、木炭の枯渴が原因で藩に中絶を願っていたが、さらに「当夏、本小屋、並ビ炭小屋、山内下小屋共、大半焼失仕り候」とあり、火災も発生したようである（11）。このような状況の中で、弓谷鉦で雇用されていた労働者とその家族が八重瀧鉦へ引越してきたのである。この事例は、広瀬藩領鉦山内から同藩領鉦山内への移動である。

次に史料③をみてみよう。

史料③

宗門返証文之事

清蔵

一養女さと

歳式拾式

右之者在所飯石郡廣瀨御領竹尾村八重瀧鑪宗門禪宗同御領入間村長栄寺且那二而年々八重瀧鑪宗門御改帳付之處、今般飯石郡民谷村良蔵妻二成引越参申候、彼地江参候而者宗旨真宗同郡吉田村円寿寺且那二致契約、則長栄寺より円寿寺宛宗旨放状并右放証文を以来卯宗門御改より民谷村増人ニ書出可申候、竹尾村八重瀧二而者減人ニ御書出可被成候、為後日宗門受取証文仍而如件

飯石郡民谷村

天保一三寅

年寄李蔵

庄屋権市

下郡忠四郎

飯石郡廣瀨御領

竹尾村八重瀧鑪

鉄師

田部新四郎

史料③では、八重瀧鉦山内の成人女性「さと」が、飯石郡民谷村在住の「良蔵」の妻になるため、八重瀧鉦山内から地下へ引越したことがわかる。この事例は、広瀨藩領鉦山内から農村への移動である（12）。

次に史料④をみてみる。

史料④

宗門放状之事

表御領飯石郡吉田町鍛冶屋者正助女子けん歳式拾四宗旨代々真宗同郡吉田村円寿寺且那二而年々吉田町鍛冶屋者宗門御改帳付紛無御座候、

然ル所此度廣瀨御領飯石郡竹尾村八重瀧鑪惣兵衛妻二罷成引越参申候、其御地江参候而者宗旨禪宗同郡入間村長栄寺且那二契約仕筈二御座候、依之右円寿寺より長栄寺宛宗門放状相添送り進申候、於其元無別条者来酉宗門御改より其鑪増人ニ御書載可被成候、此元減人ニ書出可申候、自今以後此方何之構無御座候、為後日宗門放状仍而如件

表御領飯石郡

嘉永元年

下郡清四郎（印）

申

吉田町鍛冶屋

田部長右衛門（印）

廣瀨御領竹尾村

八重瀧鑪鉄師

田部新四郎殿

史料④では、松江藩領飯石郡吉田町鍛冶屋山内に居住していた正助の娘「けん」が、広瀨藩領飯石郡竹尾村八重瀧鉦山内居住の「惣兵衛」の妻になるために八重瀧鉦山内へ引越したことがわかる。この事例は、松江藩領鍛冶屋山内から広瀨藩領鉦山内への移動である。続いて史料⑤をみてみる。

史料⑤

宗門返り証文

留次

一後家そよ

右之者在所飯石郡廣瀨御領竹尾村八重瀧鑪宗旨禪宗同御領入間村長栄寺且那二而年々竹尾村八重瀧鑪宗門御改帳付之處、今般飯石郡吉田町鍛冶屋者与次郎妻二成引越参候、彼地江参候而者宗旨禪宗同郡吉田村桂昌庵且那二致契約、則長栄寺より桂昌庵之宗旨放状并右放証文を以来巳宗門御改より吉田町鍛冶屋者増人ニ書出可申候、竹尾村八重瀧鑪

二而者減人二御書出可被成候、為後日宗門受取証文仍如件

飯石郡吉田町鍛冶屋主

天保十五辰十二月

田部長右衛門（印）

下郡清四郎（印）

飯石郡廣瀬御領竹尾村

八重滝鑪鐵師

田部新四郎殿

史料⑤では、広瀬藩領飯石郡竹尾村八重滝鈔山内留次後家の「そよ」が、松江藩領飯石郡吉田町鍛冶屋山内の「与次郎」の妻になるために町鍛冶屋山内へ引越したことがわかる。この事例は、廣瀬藩領鈔山内から松江藩領鍛冶屋山内への移動である。

おわりに

以上、八重滝鈔について、その経営規模と山内の特徴の一端を示した。

八重滝鈔は、広瀬藩領飯石郡竹尾村に立地していたが、文政八年（一八二五）の操業当初から松江藩領飯石郡吉田町に本拠地をおく田部家の経営であり、その生産の主流は銑であった。同鈔の生産規模、販売規模は田部家経営鈔の中でも比較的大きかった。

そのような鈔の山内には、労働者とその家族一〇〇人以上が生活を営んでいた。山内を構成する人々は、田部家経営の鈔・鍛冶屋間の移動はもちろんのこと、鈔と農村間の移動、農村では松江藩領や石見国からの移動などもあり、近世後期における八重滝鈔山内と他地域との交流がみとれる。

これらの人の移動は、鉄の需要拡大を背景にした鉄師の経営拡大（鈔

・鍛冶屋増設）による大量の労働者の確保の必要性が原因の一つとなつていふと考えられる（13）。鉄山経営に従事する労働者を農村に求めることによって、山内と農村との人的交流は深まっていく。八重滝鈔の操業はまさに鉄師の経営拡大期にあたり、経営拡大をめざし広瀬藩領へ進出する田部家の一事例であり、八重滝鈔山内と他所との人の移動もそのような方針の影響を受けてのことであろう。

注

（1）掛合町誌編纂委員会編、掛合町誌刊行会発行、一九八四年

（2）平凡社、一九九五年

（3）拙稿「明治初年出雲地域における鉄山経営の基礎的考察」『たたら研究』第四八号、二〇〇八年、表一一参照。

（4）前掲注（3）論文。

（5）「文化九年申十二月入間村・竹尾村論山演説書」。

（6）前掲注（5）史料。

（7）前掲注（5）史料。

（8）相良英輔「田部家の由来とたたら製鉄業の展開（附、史料「田部家の歴代当主名と戒名」）同編著『松江藩鉄師頭取田部家の研究』文部科学省特別教育研究経費島根大学「特定研究部門」研究プロジェクト（代表大庭卓也）、二〇〇九年。

（9）『明治六年国費部旧松江藩引継雑款鉄山一件』島根県立図書館所蔵。

（10）史料①には、左記のような雛形と考えられる案文も残されていた。

宗門放状之事

表御領何郡何村何右衛門何たれ歳何程宗旨代々何宗何郡何村何寺
旦那二而年々何村宗門御改帳付紛無御座候、然ル処此度廣瀬御領

飯石郡竹尾村八重瀧鑪福次郎妻ニ罷成引越参申候、其御地江参候而者宗旨禪宗同郡入間村長栄寺旦那ニ契約仕簀ニ御座候、依之右何寺より長栄寺宛宗門放狀相添送進申候、於其元無別条者来未宗門御改より其鑪増人ニ御書載可被成候、此元減人ニ書出し可申候、自今以後此方何之構無御座候、為後日宗門放狀仍而如件

表御領何郡何村

弘化三年

年寄たれ

午

庄屋たれ

下郡

廣瀬御領飯石郡

竹尾村八重瀧鑪鉄師

田部新四郎当テ

(11)「広瀬御領、弓谷鉦所鉄山伐尽シ、中絶仕り度段松江表へ差出候願書左之通」(島根県飯石郡頓原町教育委員会編集・発行『志津見ダム関連埋蔵文化財発掘報告書 弓谷たたら』二〇〇〇年、六三〜六四頁)。

(12) 民谷村は、天和三年(一六八三)、民谷川を挟んで松江藩領と広瀬藩領に分割された。史料中の民谷村が松江藩領であるのか、広瀬藩領であるのか、現在の段階では明確にできなかった。今後の課題としたい。

(13) 拙稿「櫻井家「召抱人」の構成―『明治式巳十月 召抱人別書出帳』(櫻井家文書)の分析―」宗門改帳研究会『宗門改帳からみる山陰の近世社会その2』二〇〇七年。

〔付記〕本稿の作成にあたり、史料の閲覧、利用にご高配をいただいた田部辰子氏、坪倉要輔氏には末筆ながらお礼申し上げます。

表1 文化8年(1811)竹尾村・入間村・穴見村の状況

	入間村	竹尾村	穴見村
当時有高	140石4斗4升2合	31石8斗1升2合	104石1斗3升7合
家数	51軒 (入間村23軒・枝郷寺谷18軒・枝郷出来山10軒)	19軒(本村14軒・枝郷八重山5軒)	34軒(本村20軒・枝郷檜谷14軒)
村長	東西30丁・南北40丁	東西14丁・南北34丁	東西23丁・南北25丁
村内往還	10丁(松江領飯石郡掛合村～竹尾村境)	30丁(入間村境～都加賀村境)	
枝郷往還	往還より居村迄方角南、道程15丁引込		
村内街道	2ヶ所 (能義郡廣瀬城下道程14里、 神門郡杵築大社へ道程9里)	2ヶ所 (能義郡廣瀬城下道程14里、神 門郡杵築大社へ道程9里)	2ヶ所 (能義郡廣瀬城下道程15里、神 門郡杵築大社へ道程8里)
土橋	大川土橋長サ6間	八重山川土橋長サ4間	
寺	禪宗長栄寺		
神社	天満宮	八重山権現社	天満宮1社
古城跡	3ヶ所	1ヶ所	

出典:「書上」(入間田部家文書)

表2 天保7年(1836)竹尾・入間・穴見村方人口

村名	人口(人)
竹尾村	80
入間村	285
穴見村	166

出典:「入間・竹尾・穴見村歳々御裁許并諸日記」
(入間田部家文書)

表3 松江藩領飯石郡内村別男女別人口構成(人)

番号	村名	総数	構成比率	男性	構成比率	女性	構成比率
1	三刀屋栗谷・掛合栗谷村	306	1.7%	149	1.6%	157	1.8%
2	多久和村	896	5.0%	482	5.1%	414	4.8%
3	神代村	162	0.9%	92	1.0%	70	0.8%
4	六重村	253	1.4%	133	1.4%	120	1.4%
5	中野村	543	3.0%	277	3.0%	266	3.1%
6	須所村	213	1.2%	113	1.2%	100	1.2%
7	掛合上分・下分村	997	5.5%	563	6.0%	434	5.0%
8	掛合町	175	1.0%	77	0.8%	98	1.1%
9	民谷村	220	1.2%	114	1.2%	106	1.2%
10	吉田村	998	5.5%	502	5.3%	496	5.7%
11	吉田町	429	2.4%	212	2.3%	217	2.5%
12	曾木村	195	1.1%	99	1.1%	96	1.1%
13	上山村	424	2.4%	213	2.3%	211	2.4%
14	深野村	241	1.3%	121	1.3%	120	1.4%
15	川手村	267	1.5%	142	1.5%	125	1.4%
16	上熊谷村	631	3.5%	337	3.6%	294	3.4%
17	下熊谷村	565	3.1%	296	3.2%	269	3.1%
18	給下村	909	5.0%	471	5.0%	438	5.1%
19	伊萱・西三代村	357	2.0%	182	1.9%	175	2.0%
20	法師田・水越村	278	1.5%	142	1.5%	136	1.6%
21	屋内村	297	1.6%	151	1.6%	146	1.7%
22	案田村	321	1.8%	165	1.8%	156	1.8%
23	大谷村	135	0.7%	72	0.8%	63	0.7%
24	尾崎村	222	1.2%	177	1.9%	145	1.7%
25	里坊村	364	2.0%	179	1.9%	185	2.1%
26	根波村	598	3.3%	316	3.4%	282	3.3%
27	朝原村	515	2.9%	274	2.9%	241	2.8%
28	宮中村	429	2.4%	224	2.4%	205	2.4%
29	反部村	333	1.8%	175	1.9%	158	1.8%
30	反部八幡領	338	1.9%	181	1.9%	157	1.8%
31	原田村	479	2.7%	251	2.7%	228	2.6%
32	松笠村	602	3.3%	297	3.2%	305	3.5%
33	多根村	831	4.6%	436	4.6%	395	4.6%
34	坂本村	310	1.7%	164	1.7%	146	1.7%
35	乙多田村	285	1.6%	147	1.6%	138	1.6%
36	加食田村	534	3.0%	278	3.0%	256	3.0%
37	宮内村	312	1.7%	116	1.2%	96	1.1%
38	殿川内村	361	2.0%	183	1.9%	178	2.1%
39	菅原村	392	2.2%	194	2.1%	198	2.3%
40	三刀屋町	958	5.3%	487	5.2%	471	5.4%
41	吉田町鍛冶屋	364	2.0%	201	2.1%	163	1.9%
	合 計	18039	100.0%	9385	100.0%	8654	100.0%

出典：「飯石郡中宗門改村別人高書出帳(嘉永3(1850)年)」(原家文書、島根県立図書館所蔵)

表4 天保7年(1836)穀類出来高(俵)

村名	米	大豆	小豆	蕎麦	粟	稗	合計	備考
入間村	311.1065	14	5	10	4	6	350.1065	史料上では合計350俵
竹尾村	76.015	5	2	5	2	3	93.015	史料上では合計88俵
穴見村	138.215	10	2	6	0	0	156.215	史料上では合計156俵
合計	525.3365	29	9	21	6	9	599.3365	

出典：「入間・竹尾・穴見村歳々御裁許并諸日記」(入間田部家文書)

表5 明治5年(1872)3・4月～12月田部家鉄山収支

		菅谷鉦	割合	杉戸鉦	割合	中谷鉦	割合	八重滝鉦	割合	弓谷鉦	割合	田部家全体	割合	備考
粉鉄(貫目)		107732	26.5%	60023	14.8%	71967	17.7%	95610	23.5%	70822	17.4%	406154	100.0%	
生産高(貫目)	銅	5427	35.5%	1483	9.7%	6930	45.3%	811	5.3%	645	4.2%	15296	100.0%	
	銑	17745	26.2%	12450	18.4%	7357	10.9%	18297	27.0%	11938	17.6%	67787	100.0%	
	鋳	6421	25.8%	2173	8.7%	5484	22.1%	7573	30.5%	3192	12.8%	24843	100.0%	
	合計	29593	27.4%	16106	14.9%	19771	18.3%	26681	24.7%	15775	14.6%	107926	100.0%	
鍛冶原材料(貫目)	銑	17343	21.4%	24926	30.8%	11533	14.2%	18921	23.4%	8295	10.2%	81018	100.0%	
	鋳	13236	30.9%	0	0.0%	8802	20.6%	14440	33.7%	6330	14.8%	42808	100.0%	
	合計	30579	24.7%	24926	20.1%	20335	16.4%	33361	26.9%	14625	11.8%	123826	100.0%	
割鉄(貫目)		15988	23.8%	15511	23.1%	10632	15.8%	17442	25.9%	7647	11.4%	67220	100.0%	
売高(貫目)	銅	4840	33.8%	600	4.2%	7369	51.4%	1274	8.9%	249	1.7%	14332	100.0%	
	銑	4536	42.0%	42	0.4%	12	0.1%	1457	13.5%	4752	44.0%	10799	100.0%	
	鋳	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	27	100.0%	0	0.0%	27	100.0%	
	割鉄	20163	24.5%	18073	22.0%	14880	18.1%	17823	21.7%	11277	13.7%	82216	100.0%	
	合計	29539	27.5%	18715	17.4%	22261	20.7%	20581	19.2%	16278	15.2%	107374	100.0%	
代価(円)	銅	1148	41.3%	132	4.7%	1252	45.1%	189	6.8%	58	2.1%	2779	100.0%	
	銑	568	43.7%	5	0.4%	1	0.1%	188	14.5%	537	41.3%	1299	100.0%	
	鋳	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%	0	0.0%	2	100.0%	
	割鉄	5646	24.5%	5055	22.0%	4166	18.1%	4990	21.7%	3156	13.7%	23013	100.0%	
	合計	7362	27.2%	5192	19.2%	5419	20.0%	5369	19.8%	3751	13.8%	27093	100.0%	
残品(貫目)	銅	2598	27.0%	2194	22.8%	3253	33.8%	711	7.4%	865	9.0%	9621	100.0%	
	銑	31129	21.0%	51519	34.7%	13837	9.3%	35216	23.7%	16716	11.3%	148417	100.0%	
	鋳	14836	25.7%	2173	3.8%	19732	34.1%	18393	31.8%	2686	4.6%	57820	100.0%	
	割鉄	25771	24.2%	23098	21.7%	19755	18.6%	23265	21.9%	14404	13.6%	106293	100.0%	
	合計	74334	23.1%	78984	24.5%	56577	17.6%	77585	24.1%	34671	10.8%	322151	100.0%	
入費(円)		4792	26.3%	3404	18.7%	3260	17.9%	4327	23.8%	2408	13.2%	18191	100.0%	
収支損益(円)		2570	28.9%	1788	20.1%	2159	24.3%	1042	11.7%	1343	15.1%	8902	100.0%	

出典:「出鉱表」(『明治六年国費部旧松江藩引継雑款鉄山一件』、島根県立図書館所蔵)

表6 明治5年(1872)3・4月～12月八重滝鉦経営収支

		八重滝鉦	割合	備考
生産高(貫目)	銅	811	3.0%	
	銑	18297	68.6%	
	鋳	7573	28.4%	
	合計	26681	100.0%	
売高(貫目)	銅	1274	6.2%	
	銑	1457	7.1%	
	鋳	27	0.1%	
	割鉄	17823	86.6%	
	合計	20581	100.0%	
代価(円)	銅	189	3.52%	
	銑	188	3.50%	
	鋳	2	0.04%	
	割鉄	4990	92.94%	
	合計	5369	100.0%	
入費(円))		4327		
収支損益(円))		1042		

出典:「出鉱表」(『明治六年国費部旧松江藩引継雑款鉄山一件』、島根県立図書館所蔵)

表7 八重滝鉦山内人口(人)

年	男	女	合計
安政4	62	54	116
安政5	70	55	125

出典:「雲州飯石郡八重瀧鑛午宗門改増減帳(安政5年8月)」(入間田部家文書)

表8 安政5年八重滝鉦山内宗門内訳(人)

宗門	男	女	合計
禪宗	37	30	67
一向宗	33	25	58
合計	70	55	125

出典:「雲州飯石郡八重瀧鑛午宗門改増減帳(安政5年8月)」(入間田部家文書)

表9 八重滝鉦安政4～5年の山内人口増減状況(人)

内訳	軒数	男	女	合計	家族形態	引越の場合、元居住地	備考
増人	1	2	0	2	戸主＋子	松江御領仁多郡竹崎村	
	2	1	0	1	戸主	松江御領仁多郡大谷村	
	3	2	2	4	戸主＋女房＋子	松江御領大原郡阿用村	
	4	1	0	1		奴可郡久佐村	八重滝鉦山内労働者養子
	5	1	0	1			誕生
	6	1	0	1			誕生
	7	1	0	1	戸主	石州大智郡井原村	
	合計	9	2	11			
減人	1	1	1	2	戸主＋姉		
差引	6	8	1	9			

出典:「雲州飯石郡八重瀧鑪午宗門改増減帳(安政5年8月)」(入間田部家文書)